

現代文学における「姨捨」の系譜(五)

井上靖 「姨捨」

工藤 茂

関敬吾氏は『日本昔話大成』¹において、親棄山（蟻通明神親棄奮、親棄山）の昔話を、「笑話」の三「巧智譚」B「和尚と小僧」の項に分類している。周知のように親棄山の昔話には、難題が出され、それを老人の知恵で解く場面がある。蟻通明神の昔話には、知恵のある中将が登場して国難を救う。

親棄奮の昔話では孫の機知で老人が救われる。そのために、一見悲惨な内容を語る昔話のように見えながら、『日本昔話大成』では、機知や頓知を主題とする昔話を総括した、「和尚と小僧」の項に分類されたのであった。

もっとも、親棄山の昔話の内容は、必ずしも悲惨な訳ではなく、よく聴いてみると、それは老人の知恵と子の親孝行の昔話だった。悲惨なのは、老人を捨てる制度があったと語られる、その国の政治のあり方だったのである。ところが戦後の文学に現われたそれは、親が子に自分を捨てることを要求して子を困惑させるものに変わった。つまり、したたかな老婆の姿と、その老婆によって困らされる子の姿を、ある意味で滑

稽に描いていく。その代表が深沢七郎の「檀山節考」であった。そして、その小説に先鞭をつけたのが、その前年に発表された井上靖の「姨捨」だったのである。

一

井上靖の「姨捨」は、昭和三十年一月号の『文芸春秋』に掲載された作品である。小説というよりは随筆に近い、それでいて虚構もある作品で、福田宏年氏の言う「随筆的小説」と呼ぶのが最も相応しい作品である。福田氏は『井上靖文庫』³の「解説」に、「姨捨」は老いたる母と弟妹のなかに突如すき間風のように訪れる出家遁世の志ともいべき現実遊離感をさぐって、自分自身の血を確かめている」と書いているが、まさにそのような小説である。氏はまた新潮文庫本の解説に、「一族のなかに世襲の血として流れている、「出家遁世の志」とでもいべき、現実遊離の心をさぐったもの」とも述べている。これを受けて阿部正路氏は、「福田宏年氏のこの指摘は、

もつとも秀れた井上靖の『姨捨』の本質を見抜いた批評だと思ふ」と言い、へいわば、姨捨伝説が各地に伝播されて色褪せなかつたのは、この、世襲の血として、日本人の心の深部に流れている『出家遁世の志』のためではなかつたのか⁴と述べている。氏によって井上靖の「姨捨」がこのように捉えらるる時、この主題は井上一族ばかりではなく、日本民族の一傾向として普遍化され、日本文学の「姨捨」の伝統の中に位置づけられる。逆に言えば、この小説にはそれだけの重みがあつたのである。

さて、この小説は、私が初めて姨捨山の棄老伝説を耳にしたのは一休何時頃のことであつたらうか」という回想の一行から始まり、「私」が実際に姨捨山の土を踏んだ晩、戸倉の宿で夜半激しい雨の音を聴いている場面が終わる。つまり、姨捨山の説話を枕にし、その間に母、妹、の姿を置き、そこから連想された弟と叔父の不意の転身を叙し、最後に姨捨の地の叙述で締め括るといふ、構成の確かな小説であつた。

ところで作者は、冒頭の一行に続けて、次のように筆を進めていく。

私の郷里は伊豆半島の中央部の山村で、幼時私はそこで育つたが、半島西海岸の土肥地方にも、往時老人を山に棄てたという話が語り伝えられており、おそらくその話と一緒に、姨捨山の伝説は私の耳にはいり、私の小さい心を悲しみでふくらませたようである。

右の引用で知れるように、作者はわが国に伝承されてきた

昔話を意識的に用いて、この作品を創り上げていく。いやそればかりではない。作者の試みの中にはさらに、日本文学の伝統としての姨捨の中に、自らの作品を位置づけようとする意図があつたと思われる。なぜならばこの後に、信濃郷土誌刊行会発行の『姨捨山新考』を援用する形で、日本文学の中の姨捨が紹介されていくのだから。そしてこの点が、深沢七郎の「檀山節考」と大きく隔たるところであつた。

それはさておき、右の引用部分に続けて、作者はさらに次のように書いている。

私はその時五つか六つくらいではなかつたかと思う。その話を聞いて縁側へ出ると、私は声を上げて泣き出した。その場所が何処であつたか記憶していない。ただ、ら覚えに覚えていることは、祖母だったか母だったか、とにかく家人が急に私が泣き出したことを訝つて、縁側へ飛び出して来て、何か二言三言言葉をかけてくれたことである。私には勿論物語そのものは理解できなかつたが、母を背負つて、その母を山へ棄てに行くという事柄の悲しみだけが抽象化されて、岩の間から滴り落ちる水滴のように、それが私の心に沁み入って来たのである。私は自分が、母と別れなければならぬという悲しみに耐えかねて泣き叫んだのである。

かつて私は、右の引用部分に関して以下のように書いたことがある。すなわち、へこれは「姨捨」の最初のほうの一節である。おそらく作者の幼児の時の記憶をもとにして書かれた

ものであるが、いかに鋭敏な感受性があつたにしても、子供が物語を聞いただけで「泣き叫ぶ」ほどの激しい悲しみに襲われるものであろうか。おそらくはそのようなことはあるまい。けれども、これが井上靖の幼時においては、あつても不思議はない、と私は思うのだ。なぜならば、彼は数え年六歳の年から小学校六年生の年まで、おおよそ七年間、両親と別居して暮らしていたのだから。従つて引用文の姨捨山の物語を聞いて激しい悲しみに襲われた時期は、両親と別離しなければならなかつた時期と重なり合っている。しかも、この引用箇所の上に続く、「姨捨山の説話をはつきりと一つの筋を持った物語として受取つたのは、十か十一の時のことである。」という時期もまた、両親と別居した時期と重なっているのである。

以上のことから、私たちは彼の内部に姨捨山の物語が定着した時期に、彼が両親と遠く離れて生活しなければならなかつたことを知る。この時はじめて、「私は自分が、母と別れなければならぬという悲しみに耐えかねて泣き叫んだのである。」という表現の真実性を確かめることができるのである。

少年期の多感な心は、「愛別離苦」の思想をば知らずとも、そのテーマに貫かれたその物語を、井上靖自身を主人公とした物語として吸いとってしまったのではあるまいか⁵⁾と。そしてその無意識の表出を、私は「姨捨」の次の部分に見ていたのである。

私が幼時聞いた物語の中で現在に到るもなお忘れないで

いるものは、高野山に父を訪ねて行つた石童丸の物語とこの姨捨山の物語である。共に親と子の愛別離苦をその主題としている。

井上靖が幼少時代の相当に長い時期、両親の許を離れ、祖母かのの手によって育てられたことは周知のことである。かのは靖とは血の繋がりがなかつたのに、彼を可愛がつた。後年、彼はその当手を振り返り、そこで育まれた「愛」が特殊な愛であつたことを述懐する。つまり、愛はその根底に一種の取引きを内在させる同盟関係であることを。しかしそれは、少年靖と祖母かのの愛であつた。戦後彼は、「猟銃」、「闘牛」、「通夜の客」、「黯い潮」などにおいて、愛の諸相を追求している。おそらく彼の内面に、愛に対する懷疑があつたからであろう。「姨捨」には、肉親である母に対する作者の愛の確認が描かれているように思われる。その一つが、母との別れによつて確かめられた愛情であつた。「姨捨」の冒頭の部分は、そのようにして姨捨山の棄老伝説と母への愛とが結び付いた場面となつたのである。そしてそれは、「私」が七十を過ぎた母を背負つて姨捨を歩いている空想の場面へと続いていく。

二

母は何かの拍子にふと、

「姨捨山つて月の名所だというから、老人はそこへ棄てられても、案外悦んでいたかも知れませんよ。今でも老人が捨てられるというお触れがあるなら、私は悦んで出

掛けて行きますよ。一人で住めるだけでもいい。それに棄てられたと思えば、諦めもいいしね」

そう言ったことがある。母は七十歳だった。

その場に居合せた「私」や「私」の弟妹たちは、母のその言葉を聞いて、一様にはっとする。そして私は、母が「自分が娘捨の世話の世界では、丁度山に棄てられる七十歳になっていることに気付き、生来の自尊心の強さと負けん気から、その説話にと言うより、それに何か似通って来ている戦後の時代の雰囲気というものに瞬間挑戦する気になったのではないか」と思うのである。ところが、後に九州北部の遠賀川沿いの炭坑町へ行った妹に会った時、妹は、

「(前略)わたし、母さんはあの時、本当に娘捨山に棄てられたいと思ったのではなかったかと思うわ」と言い、

「なぜか、そんな気がします。本当に一人きりだけになって、一切の煩わしいことから離れ、心から、どこかの山の奥へ棄てられたかったのではないかしら」と言い、更に、
「わたしだって、家を飛び出す時は、そんな気だったんです。何というか、こう、急に一切の煩わしさから離れて一人になりたくなっちゃって——」と言うのである。

この妹は、戦時中結婚して二児を儲けたが、事情があつて夫と子供を置いて婚家を飛び出し、一時実家である私の両親の許に帰っていたが、こんどは、自活するということを理由にそこを飛び出し、その炭坑町にひとりて生活している妹だった。「私」は妹の言葉を彼女らしい見方だと受け取りながら、

「彼女こそ九州の炭田地帯の一角で、人工の不自然さを持つた石炭殻の娘捨山の上に出る月を」眺めて暮しているのだな」と気づくのである。そして、母にあのよくな言動をとらせた根源にあるものを、一族の血に流れている「一種の厭世観」であると捉えるのである。そう気づいてみれば、妹清子ばかりではなく、弟の承二、母のすぐ下の弟にあたる叔父たちの一風変った転身も納得がいくのであった。同時にそれは、「私」自身のアイデンティティーの確認でもあった。その箇所を掲げてみよう。

こういう私自身、体の中にそうした血を持っていないとは言えなかった。清子にも承二にも無意識のうちに、ある共感を感じていたし、叔父の、一見理解にも苦しむ転身に対しても、私なりの理解の仕方をしていた。彼等が、そうしないよりも、そうした事に於て、私は彼等が好きなのであった。

ところで、ここに登場する「私」の妹、弟、叔父を井上清との関係に還元してみると、どのようなことになるのであるうか。すでに福田宏年氏にそれに言及したものが⁽⁶⁾あるので、それらを参考にして考えてみたい。

妹清子は、私の四人兄弟の末の妹である」と表現されている。この表現通りであるとすれば、それは靖の末の妹の波満子という人にあたる。福田宏年氏は「末の妹波満子は、ほぼ小説と同じ経過を辿って、北九州ではないが、東京で美容院を経営している」と述べている。とすれば、妹清子を北九州

のボタ山に配したのは、作者の虚構ということになろう。だが、彼女に内在する「一種の厭世観」は、小説通りと受け取ってよさそうである。

弟の承二は、小説では一流新聞の政治部に勤めていながら、急にそこが厭になつて辞め、妻の実家のある地方都市に帰つて、その土地の小さい銀行に勤めることになつてゐる。井上靖には一人しか弟がいないので、それは弟の達という人にあつたと考えられる。へ弟の達は、東大独文科を出て共同通信社に勤め、特派員も経験した人であるが、ある時期に妻の実家のある沼津に引こんでゐる」と福田氏は書いてゐる。

叔父については、「母のすぐ下の弟」と小説に書かれてゐる。井上靖の母のすぐ下の弟というと、井上欣一という人になる。この人は渡米し、サンフランシスコで妻登志子と結婚し、晩年は帰国して伊豆で亡くなつた人である。福田氏はこの人のことを、へ若い頃志を抱いてアメリカに渡り、努力の末に一時は大きいホテルをいくつか持つほどに成功したが、ある時を境にして事業から一切手を引き、ニューヨークの片隅のアパートに老夫婦だけで住んでゐた。その後郷里の湯ヶ島に帰つて、靖の生家の近くに小さい洋風の家を建て、悠悠自適の生活を送つてゐたが、先年物故した」と述べてゐる。井上靖の「月の光」(昭44)、「道」(昭46)という作品にも登場する人物である。ところが「姨捨」ではこの叔父のことを、へ土木会社の社長という一応成功者としての地位を築いたにも拘らず、終戦直後「これといった理由もなくそれを退き、その後薬種商、

雑貨屋などという二、三の商売を始めたが、どれもうまく行つてゐるとは言えなかつたと、描いてゐる。とすると、この人は母の二番目の弟にあたる賢二という叔父のことであろうか。この人のことを福田氏は「叔父の井上賢二のことは、「土の絵」という短篇にも出てくるが、実際は、伊豆のバス会社の重役となり、やがて社長を約束された地位にありながら、ある日突然それを捨てて、反物の行商を始めた」と紹介してゐる。

欣一は明治二十二年十二月十三日生まれ、賢二は明治二十五年五月二十五日生まれであるから、井上靖が「姨捨」を書いてゐた昭和二十九年の時点では、どちらも六十歳を超えてゐる。したがつて、へ現在は六十歳を越えた叔父」という「姨捨」の表現は、小説に出て来る叔父がどちらの叔父であるかの決め手にはならない。だが、欣一は後に帰国するとは言え、アメリカにあつたこと、井上文次の家系を欣一ではなく賢二が継いでゐることなどを考え合わせると、「姨捨」の叔父のモデルは、賢二だつたのではないかと考えられる。

いずれにしろ、井上靖の家系を流れる「一種の厭世観」とそれによる転身、それは彼自身の内部にも、確実に受け継がれていたのである。そしてその発見を主題にしたのが、この「姨捨」という小説であつた。

三

「私」の母が姨捨山に棄てられたいと言つた時から、「私」

の内部には姨捨への関心が再び高まつてくる。

私が姨捨附近を通過する時、例外なく私を襲つて来る感慨は、必ずその中に老いた母が坐つていた。ある時は姨捨駅を通過する時、自分が母を背負い、その附近をさまよい歩いてゐる情景を眼に浮べた。

時は太古、場所は荒涼たる原野、月光がへ辺り一面に青く降つてゐる。

「月の光」の場面もそうであるが、井上靖の場合、母子の別離の情景には、青い月の光が降り注ぐ。「姨捨」の本文にあるように、絵本「おばすて山」の挿絵が、内面に刻印づけられてゐるせいであろうか。これも例外ではない。月の光の中を、「私」は母を背負つて歩いていく。母の氣に入った捨て場所がなくて方々歩き廻つた果てなので、「私」はひどく疲れてゐる。「私」が「ここにしますか」と言うと、母は生れ付きの妥協のなきで、「厭、こんな場所」と言う。

「暴れないで静かにして下さいよ。私も疲れてゐんです。お母さんは背負われているからいいが、私の方は背負つてゐるんですからね。お願いです。やはり、家へ帰ることにして下さい。みんなもどんなに安心するでしょう」

「厭！」

またしてもびしやりと母は言う。

「厭でも知りません。こんなところを一晚中うろつていられますか。本当に私は帰りますよ」

すると、母は急に打つて変つた弱々しい声を張り上げる。

「堪忍しておくれ。それだけは堪忍しておくれ。どうか家へだけは連れ戻さないでおくれ。もうなんにも言いません。どんなところでも結構です。棄てておくれ。わが儘は言いません。あそこに小屋が見える。あそこでもいい。あそこへ棄てておくれ」

引用した右の会話で分かるように、ここには過去の姨捨においては見られなかつた、二つの特色が見られる。その一つは母自身が自分を捨ててくれと要求していること。もう一つは、会話のもつおかしみである。

前者の特色について作者は、へ私は自分が棄てられたいとせがんでゐる母を想像したことが厭であつた」と言いへそれにして、私はどうしてそんな母を想像したのであるうか」と述べてゐるが、それは母の性格へ自尊心や氣儘や氣難しさ」に由来するものであつた。と同時にそれは、一族の血に流れてゐる（一種の厭世観）が「私」（それは作者と重なる私）の中にも流れてゐることを発見する契機にもなつていた。へ私は私の背の上に、母に代つて自分を置いてみた。私が老人になつたら、今空想した母のように或いは自分はなるかも知れないと思つた」という箇所に、そのことがはっきりと示されてゐる。

後者については、作者は次のように書いてゐる。

（略）空想の中の母に、いかにも自然に母らしい性格

が滲み出ていることが可笑しかった。姨捨を舞台とした私の空想的一幕物は、例の棄老説話の持つ主題とはかなり遠く隔たっていた。私の場合は母自らが棄てられることを望んでいるからである。

ここにはまた、日本文学の「姨捨」の系譜に自己の作品を位置づけながら、そこから一步を抜け出した新しい伝統を創造しようとする作者の意図が、述べられていたのであった。

この小説の最後の場面は、「私」が実際に姨捨の土を自分で踏んだ秋の場面となっている。運転手の案内で紅葉の美しい姨捨を歩いている時、運転手は本当の姨捨山は冠着山のことだと言う。その山は、へ中腹に駅のある丘陵の向うに重なるようにして、へ山巔を雲に包まれたまま、その山容の一部を現わしていた。それはへちよつとやそつとでは登って行けそうもない遠い高い山であった。「私」は、母もこの山を見たら、冗談にも姨捨山に棄てられたいなどとは言わなかつたらうと思う。だが、そう思った後ですぐに自分の甘さに気づき、思い直して次のような感慨を懐くのであった。

私は勝手に自分の姨捨山を想像し、母を背負ってそこを彷徨する自分を脳裡に描いたりしていたが、母は母であるいは私とは全く別に、この冠着山のような急峻な大山を姨捨山として想像していたかも知れないと思った。

そもそも姨捨山というものがこのような山である筈であった。清子が身を投じた姨捨山も、あるいはまた承二のそれも、考えてみれば確かにいま自分が歩いている紅

葉に飾られたなだらかな丘陵より、峻峻な冠着山の方にずっと近くに違いなかった。

じつは、井上靖自身も毎日という大新聞社の部長から転身して作家になった。したがって作者自身が最も姨捨山の厳しさを知っていた筈である。してみれば、右の感慨は、自分の肉親、弟妹に仮託した作者自身のそれだったのである。

さて、これまで眺めてきたように、この小説は、作者が幼時長年にわたって別れて暮らして来た母とその愛を確認する作業を通して、自己のアイデンティティを捉えることを試みた作品であったと言うことができよう。その主題は日本人の血に潜むへ一種の厭世観、つまり現実離脱の志であり、その特色は日本文学の一つである姨捨の中に、笑いと新しい老人の姿を導き入れた点にあったと考えられる。そしてこの後者の特色はその作者の意識の有無に関係なく、深沢七郎の小説に継承されて、「檀山節考」一篇を生んだのであった。

〈注〉

(1) 関敬吾(編集協力野村純)『日本昔話大成』9 (昭54・10・22・角川書店)

(2) 福田宏年『井上靖評伝覚』(昭54・9・10・集英社)の第七章による。

(3) 『井上靖文庫』22 (昭36・7・30・新潮社)の三三五ページ。

(4) 阿部正路『戦後文学論』(昭49・8・15・桜楓社)

の「姨捨—井上靖」の項。

(5) 拙著『挽歌の系譜—井上靖の世界—』(昭58・4

・10・日驗)の「愛別離苦の文学—『月の光』論—」の三。

なお、注(2)の福田氏の著書では、井上が両親と別れて祖母かのと住んでいた時期を、三歳から十三歳までの間としている。

(6) 注(2)の著書および「井上靖小説全集11『姨捨・蘆』付録』(昭49・11・新潮社)の福田宏年氏の解説。

(7) 注(6)の福田氏の解説。

(8)(9)同右。

(10) 注(2)と同書の一五ページ。

(11) 藤沢全「井上靖伝覚え書(1)—母方の家系とその一族・その一—」(『研究年報』第35集・昭61・11・

30・日本大学三島学園)